

西洋は日本の美意識をどういう風に見ていたのか

Martin TIRALA

(カレル大学)

日本研究は誰のものかという質問に対し日本研究は日本人の研究者のものだと答える人が多いだろう。日本人は日本語で書かれた資料を最も正しく読め、そして数百年の日本研究の伝統があり、殆どの専門的な議論は日本において行われている。一方、日本を研究テーマとして扱っている西洋の研究者の業績も無視できない。ヨーロッパとアメリカの研究者は日本を外から見ているので、様々な物事に日本人より気付くと言う人もいる。また、欧米の研究者は中国、韓国などの東アジアの国と違う文化圏の観点で見ているから、まったく異なったパラダイムに絡め考えている。しかしながら、本当にそうなのだろうか。

西洋あるいは欧米の研究者の日本研究はどのような過程を経たのか、どんな枠組みで行っていたのか、と考えた時に、具体的な例を出し検討すると、大体の姿が現れてくるだろう。長い鎖国時代の終わりを告げた明治維新以降、新しく作られた日本帝国の政府は相次いで西洋から新しいアイデアや制度などを導入していた。1880年代に導入したものの中に美学という新しい学問があるが、このことが導入されたことは不思議である。なぜなら、ヨーロッパやアメリカの大学には美学という独立した学科はまだ存在していなかったからだ。美学が初めて哲学から学問として分類されたのは日本だった。しかしながら、西洋の学問の一つとして扱われたので、日本人の美学の専門家は西洋の美学のみ研究していた。欧米の諸言語の美学専門用語を日本語に翻訳し、西洋の概念をそのまま受け入れ、主にドイツやフランスのデイスコースの影響を受け、美学の研究を始め、現在に至る。日本の美学者は基本的にカントやヘゲル等の美学の研究に貢献しているが、明治時代以前の日本の美意識に目を向けていない。

一方、欧米は昔から日本の伝統的な美意識に深く興味を持っている。しかしながら、九鬼周造の「『いき』の構造」以外、日本の現代美学の研究を全て無視し、茶道・日本庭園・俳句等の伝統的な美意識のみに魅せられている。このようなオリエンタリズム的興味は19世紀後半に生まれた。西洋で行われている日本の美意識の研究は今日までオリエンタリズムの

呪文で縛られていると言えるだろう。大正と昭和の日本の文化人もこのステレオタイプの考えを消し去りたくなかったようだ。1930年代、鈴木大拙はアメリカに禅の教えとともに「わび」と「さび」を紹介し、その後、谷崎潤一郎が「陰翳礼讃」で日本の美の概念を述べている。谷崎の独特な美観は、徳川時代に根付いた美観に近いものであり、日本語が読める西洋の研究者に、そして英語に翻訳された70年代から欧米の美学者に、大きな影響を与えた。西洋では、日本の美意識と日本の美学イコール「わび・さび」となってしまった。日本人の美学者が和の美意識を無視していたころ、ドナルド・キーンは吉田兼好の「徒然草」などの文学作品を踏まえながら、日本の美の特徴を谷崎よりの確に言い表したと思う。しかし、ドナルド・キーンが書き記している日本の美は中世の「わび・さび」の美意識に近い。日本の美意識をこのように一般化し総括する傾向は日本映画の研究の先駆者であるドナルド・リリーの研究にも見られる。日本の美意識が単純化されていると批判している専門家もいるが、キーンとリリーは日本人研究者ができなかったことに成功したと言えるだろう。若しくは、ある時代の美の特徴を見せたと言ってもよいだろう。

日本では日本の美意識を総括する美学者は殆どいない。しかし「あはれ」・「もののあはれ」・「をかし」・「幽玄」等の美的概念を個別に研究する人は少なくもない。しかし美学者ではなく、古典文学を研究する専門家のおかげで、それぞれの美意識の元々の意味が分かるようになっている。西洋でも同じく日本の美意識の基礎研究は文学の研究を専門にした人がしている。そして90年代から、特にミケーレ (マイケル)・マルラが活躍し、日本の現代美学が知れるようになったため、西洋の研究者は日本の美意識あるいは美学を少しずつ理解しようとしている。しかし現在、英語で出版されている本を見る限り、日本美学に興味のある作者はまだまだ「わび・さび」の呪文から逃れていないようだ。

Martin TRALA (プラハのカレル大学、准教授)